

私の中の日本軍（上）

山本七平

文藝春秋

著者略歴

大正十年 東京に生れる

昭和十七年 青山学院卒業、即

日入営

昭和十九年 ルソン島へ派遣さ

れ、第一〇三師団砲兵隊本部

付、少尉にて終戦

昭和二十二年 帰国

昭和三十三年 山本書店を創立

現在にいたる

著書 『ある異常体験者の偏見』

訳書 『歴史としての聖書』『概

説聖書考古学』『日本教につい

て』『につぼんの商人』など

多数

私の中の日本軍(上)

一九七五年十一月三十日 第一刷

一九七六年四月十五日 第七刷

著者 山本七平

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社文藝春秋

102 東京都千代田区紀尾井町三
電話 東京 二六五一一二一一

印刷所 凸版印刷 製本所 中島製本

万一、乱丁・落丁本の場合はお取換えいたします

©Shichihei Yamamoto 1975
Printed in Japan

私の中の日本軍（上）

装 幀 竹内和重
イラスト 貝原 浩

目次

ロッド空港事件と内務班	5
残飯司令と増飼将校	39
戦場のほら・デマを生みだすもの	60
「トツツキ」と「イロケ」の世界	91
ジャングルという生き地獄	118
戦場の「定め」と「常識」	136
軍人より軍人的な民間人	159
扇動記事と専門家の義務	188
すべてを物語る白い遺髪	219
不安が生みだす「和気あいあい」	253
「親孝行したい」兵隊たち	282

ロッド空港事件と内務班

その日の二時ごろ、電話が鳴ったので何気なく受話器を取り上げたら、朝日新聞社の森本哲郎氏であった。「やあー、久しぶりですなあ」などと悠長な声を出したところが、「山本さん！ ご存じないんですかッ！」というせきこんだ返事がかえって来た。「何かあったんですかぁー」とこちらはまだまだ呑気である。「知らないんですか！ テルアヴィヴの空港で……」

あとはご存じの通りである。文字通りの寝耳に水であった。それがそのまま森本氏にも通じたのである。「取材にうかがおうと思ってたんですが、寝耳に水じゃ！ いや夕刊が出来てますから、それをもってすぐうかがいます」

森本氏はすぐ来た。私はむきぼるように氏のもって来られた新聞を読んだ。またタイムズその他の海外の新聞記事のことも聞いた。しかし読むごとに聞くごとに、ただただ「ヘエー、ヘエー」を連発し、何かきかれるたびに、「わかりませんなあ、全く、わかりませんなあ」と半ば溜息を交えながら繰り返すだけである。「全く不可解ですな」「断絶ですかな」「一体全体どうしてこんなことを」等等、二人は、刷り上がったばかりの夕刊を間にして、ただ嘆じ合っていたような形になってしまった。

ただ少し落着いたころ森本氏が「だが今年は妙な年ですな。横井さんが出てくる、赤軍派のリンチがある、今度はテルアヴィヴの神風。何だか社会が崩れていくようだ」と言われたのが、なぜか印象に残った。なぜであろう。これらの一連の事件には何か互いに関連するものがあるのだろうか。

だいぶ前のことだが、赤軍派のリンチが次々と報道されたころ、「諸君！」誌のA記者から「ああいうことは、軍隊や戦争と何か関連がありますか」ときかれたことがある。そのとき私は「あのリンチは全くわかりませんが、軍隊にも戦争にも全然無関係だと思っています。第一、ありや戦争じゃありませんし……」といったような返事をした。

いま考えてみると、この返事は相当に無責任だが、当時は、あのリンチの報道には全くウンザリして、考えるのもいやだったのである。だがその後、中沢洽樹教授の小品集『忘却と想起』を校正していたとき、「自分の所属する大学の学部に起った闘争は、軍隊経験にも似た傷痕を胸に残し」という言葉にぶつかった。そのとき、私は、あの大学紛争と軍隊生活に、何か関連する点があるのだろうか、と少し不思議な気がした。

私は大学騒動なるものをよく知らない。しかし「罵声」「ツルシあげ」「リンチ」「法政大学のリンチ殺人事件」「虐殺の森の総括」と跡をたどって行くうちに、自分が、最も恐ろしくまた嫌悪すべき経験、思い出すだけで慄然としてくるある情景を、無意識のうちに記憶から拭い去っていたことに気がついた。一番いやなことは、やはり、自分の記憶から消してしまいうらしい。だがそれでも消すことのできない「傷痕を胸に残し」ていたのだ。

山岳アジトで、真夜中の二時に、うすぐらいロウソクの灯の下で行われた「総括」と、古いすすけた木造兵舎の、暗い裸電球の光の下で行われたあのリンチ——当時の軍隊語でいう「私的制裁」とは

同じではなかったのだろうか。確かにあれは単なる暴行ではなかった。「総括」を命ぜられて処刑されたのだ、直接的には死刑にされなかったとはいえ。

横井さんの、出て来た直後の恐怖を、単に軍法会議への恐怖と解すべきであろうか。そうは思えない。

何か小さな失策をした場合、たとえば公の制裁（たとえば重営倉のような）がないことはわかっていても、内務班で待ちうけている私的制裁を思っただけで足がすくむような思いをしたのは、私だけではない。帰れば罵声と殴打、時には半殺し——当時の軍隊語でいえば「デコデコになるまでツキ上げてやる」という状態が確実に待ちうけている場所へ、重い足を引きずって戻っていったあの時の恐怖が、横井さんにも潜在的にあったように思えてならない。

では、大学紛争の間に、これと同じようなことを、軍隊を知らない多くの人びとも経験したのだろうか。私には、日本軍の私的制裁と住民虐殺とは深い関連があると思えるが、では、学生運動から生じたある状態、すなわち赤軍派リンチに代表されるような状態とロッド空港における無差別射殺も、同じように関連があるのだろうか。

私はまた昔のことをいろいろと思い出してみた。そのきっかけは森本氏の言葉とA記者の質問である。

もっともロッド空港の事件は戦闘とはいえない。空港に下りた三人が、まずイスラエルの航空機を攻撃し、急を聞いて駆けつけたイスラエル軍と対等に銃火をまじえ、その間、不幸にして非戦闘員や外国人を巻きぞえにしてしまったというなら戦闘といえよう。

そしてそれなら、たとえば世界が衝撃を受けても、その衝撃の質は違っていただであらうし、不幸にも

犠牲者が出たとしても、日本人がプエルトリコから引き揚げねばならぬような状態にはならなかったであろう。何の關係もない第三者に直接銃口を向ければ、これは全く理由なき虐殺だから、虐殺された国の国民、プエルトリコ人が、憤激するのが当然である。

一方奇妙なことに、どの報道を見ても、この三人がイスラエル軍と対等に撃ち合った形跡がない。またイスラエル軍に損害があった様子もない。もし、三人のうちの一人が手榴弾の操作を誤って死に、もう一人は味方の弾丸にあたって死んだという報道が正しいなら、これはいずれも戦闘による死亡、すなわち戦死ではなくて「事故死」である。そのうえ残る一人が無傷で逮捕されたというなら、戦闘は皆無であったと見るべきであろう。

銃を発射して死亡者があったことと、戦闘があったということは別である。従って「イスラエルとアラブは戦争しているのだから云々」という一部の人の三人への弁護論は、戦場における非戦闘員殺害への弁護以上に成り立たない。

戦場では確かに戦闘行為は正当化されている。しかし戦闘が正当化されるということは、あくまでも「対等に銃火をまじえる」ことが正当化されていることで、非戦闘員や關係ない外国人に直接銃口を向けて無差別に銃撃しながら、戦闘行為は全くなかったという状態が、正当化されることではない。三人の行為は、戦闘中不本意ながら非戦闘員も殺傷してしまったという行為ではないから、「戦争しているのだから云々」は理由にならない。これはいわゆる「南京虐殺」その他の日本軍の虐殺行為よりはるかにひどい。

従ってイスラエルと交戦状態にあるアラブ連合の政府と機関紙の「こういう行為は支持できない」という主張が常識であり、ある新聞の「出来そこないのテロリスト」という嘲罵が正しい評価である

う。だが私には、何か「関係なき第三者を巻き込んだ無理心中」のようにも思える。

戦闘がなかったのだから、逮捕された岡本公三と戦争中の捕虜とは必ずしも同一視できないわけだが、一応両者を同じものと仮定するなら、彼が開口一番「殺してくれ」と言ったのは実に印象的であった。

これを読んで私は「バカな、昔と全く同じだ、大切な情報源である捕虜をだれが殺すものか」と思わず呟いたが、それは、この「殺してくれ」が、日本兵が捕虜になったとき発する言葉と寸分違わなかったからである。

私の部下に、オリオン峠への転進中、部隊にはぐれて捕虜になった兵士がおり、戦後、収容所であったりと会い、捕虜にされた前後のことをくわしく聞いたことがある。彼は、疲れ切って空家で寝込んでしまい、目がさめたらフィリピン人の自警団に包囲されていた。銃がない、砲手や観測手は銃をもっていないので、こういう場合には実にみじめで、自殺もできない。

フィリピンの民家は高床式で、いわば一階なしの二階だが、入口の梯子はすではずされているから、逃げ出すこともできない。彼は窓をあけ、下を見おろし、手の平で自分の喉を切るジェスチャーをして「バッテリー」と叫んだ。バッテリーとはイロカノ語で「死ぬ」または「殺す」の意味である。ところが自警団は「ノー・バッテリー・カモン」という。

それ以上言葉が通じないので、ただバッテリー・バッテリーと絶叫しているうちに喉がからからに乾き、声が出なくなった。水はない。疲労と飢渴で目まいを起して倒れたところを捕虜にされた。水を飲まされて気がつくのと、また気違いのように、殺せ、殺せとわめきつづけたが相手にされず、間道づたいに引かれていって、アメリカ軍に引き渡された。

ここでも殺せ殺せと叫びつづけたが、やがて捕虜係の二世の兵士が来て「アメリカ軍は捕虜を大切に
するから、いくら叫んでも無駄だからやめろ」といわれ、初めて叫ぶのをやめたという。この「捕
虜を大切にする」という言葉には、普通の人が考えるような「人道的」な意味はあまりない。捕虜と
は非常に重要な情報源なのである。戦場では敵情を正確に知ることが何より大切だから、捕虜は「非
常に大切なもの」であるにすぎない。捕虜の首を切って、せっかく入手した貴重な情報源を自分の手
でつぶすような愚行は、日本軍でも、戦後の「通説」のようにには行っていない。

捕虜とは何かについて、戦後の日本人には明確な概念がないのであろう。前線に処刑された死体が
ころがっていると、他の国の人には、敵前逃亡で処刑されたなとすぐ考えるが、日本人は、捕虜にされ
て敵に処刑されたなと考えるそうである。アラブ・ゲリラを探訪した日本人が全く同じ見解をのべて
いるのが興味深かったが、しかし少なくとも日本軍以外では、捕虜とは徹底的に情報をしほりとるべ
き貴重な収獲であっても、処刑すべき罪人ではない。処刑するとすれば、しほりとったカスを処分す
る場合だけである。

従っておそらくイスラエル軍は岡本公三を「非常に大切にして」出来る限りの情報を彼から入手し
ようとするであろう。

従って捕虜になったら、巧みに相手に誤れる情報を与え、同時に相手から巧みにその実情をさぐり
出し、隙を見て逃亡するというのが、外国における「捕虜心得」の第一条らしいが、この心得は日本
軍にはなかったし、赤軍派にもないらしい。

同じように、ただただ逆上して「殺せ」「殺せ」の一点張り、相手の判断を誤らすような芝居を打
ったり、相手の実情を巧みにさぐり出したりする芸当は、到底できる状態ではない。私の部下もそう

であった。岡本公三も同じらしい。

ところがこの期間が過ぎてひとたび喋り出すと、今度は何もかも洗いざらいに話してしまう。そればかりでなく、そのことで有名になったある高級将校のように、相手の観測機に乗って日本軍の陣地や配備状況を空中でご進講することさえ辞さなくなる。

おそらく岡本公三も同じで、いずれ彼は、ユダヤ人に迎合し、アラブ・ゲリラについて知っていることは、何もかも喋るにきまっている。さらに彼がイスラエルのヘリコプターに乗って、空中から、自分が訓練をうけた基地などを偵察し、イスラエル軍に説明したという報道があっても、私は少しも驚かない。

だがこの「お喋り」の段階がすぎると、普通の戦争ならそれに続いて起る捕虜交換が、急に、異常な恐怖になっていく。といっても普通の兵隊は、公的な制裁、すなわち軍法会議のことなどは実際には知らない。脳裏に焼きついているのは内務班のリンチ、すなわち私的制裁の恐ろしさである。

自分は喋ってしまった。ここであの内務班に帰されたら、それこそ「デコデコになるまでツキ上げられる」という状態が半永久的につづくのではないか、という恐怖が襲ってくる。少なくとも私の部下の場合はそうであった。彼は、軍隊における制裁をそのようにしか理解できなかった。

このことをアメリカ軍もよく知っていたらしい。戦犯容疑者収容所で私を取り調べたM中尉は、有名な宣教師の息子で横浜生れ、「日本人より日本語がうまい」一人であったが、私の容疑がはれ、また私が同中尉の父親と関係の深い学校の出であることを知ると、急に懐しくなったのか、いろいろなことを話してくれた。

彼によると「日本軍の捕虜は、いったん喋り出すと実によく喋る。何もきかないでも喋る。ただそ

ここまで誘導するには術がいるが、結局、何もかも話せばアメリカ軍の中に置いておく、だが黙秘したり嘘をついたりしたら、中立国経由ですぐ日本に送り返す、といえればいい。本当ですかと相手は念を押すから、その時には前に捕虜になっていた日本兵に、本当だと保証させればいい。ここまでくれば、何もかも洗いざらいに話してしまおう」のだそうである。

この点でも岡本公三は同じらしい。新聞によると彼は「イスラエル警察の取調べに対し『イスラエルの司法当局よりアラブ・ゲリラ運動の私の仲間の方がもっと恐ろしい』と供述」したという。この「恐ろしい」がもしリンチを意味するのなら、旧軍隊と何もかもあまり似すぎているようで、かえって気味が悪い。

では果して「私的制裁」と「住民虐殺」、「赤軍派リンチ」と「ロッド空港の乱射」は、互いに相関連する同系統の出来事なのであろうか。それはわからない。この問いに対しては、この四つを経験してなお奇跡的に生き残った人にしか証言の権利はない。だがそういう人はいない。

いないから仕方がないとはいえ、赤軍派のリンチやロッド空港の乱射について、非常に誤った断定が行われているように思う。

たとえばキリスト教関係では「聖公会新聞」で志賀正照氏が赤軍派のリンチについて、「……車の調達でもたついたり、自動車運転のミス、男女関係の乱れなどをとがめ『革命精神の不足』と断定して、集団リンチにかけた仕打ちは、何としても異常であり、日本の風土には前例のない異質のものであった」と書いており、同じ趣旨のことは他にも数多く書かれているけれども、この「革命精神」を「軍人精神」となおせば、まさにこれと全く同質のことが日本の陸軍で行われ、私はそれを体験しているのだから、「日本の風土には前例のない異質のもの」という断定は誤りといわねばならない。

まして、戦後教育の結果だとか、○×教育のためとか、父親不在のためとか、対話の欠如が原因だとかいうような言葉はすべて誤りである。あまりにも安易な断定が多すぎるように思われる。さらにロッド空港の三人の父親に対する「対話があったのか」といった意味の新聞記者の質問は全く愚問以下だと思う。

ではお前は どう思うのかと問われれば、私は自分の体験からしか判断できないが、私には、旧軍隊のリンチ、殺人までおかした大学の運動部のリンチ、ゲバ学生のリンチ、「恥の町」王子ストのリンチ、および日本軍による虐殺、ロッド空港の虐殺、これらはすべて、どこかで関係をもつ同質の事件で、この同質のものが、戦前にも戦後にもあるのだとしか思われないのである。

だが、こういった体験は、私だけでなくおそらくだれでも、あまりにも思い出したくない体験なので、無意識のうちに記憶から消し去っており、そのため今では「前例のない異質のもの」と断定されるようになってしまったのかも知れない。もしそうなら、この誤れる断定の責任は志賀氏ではなく、これを体験しながら、その実態を正しく伝えようとしなかったわれわれにあると思う。そうはいっても、私は赤軍派のことは知らないし、住民虐殺については間接には知っていても、直接手を下した経験がない。体験があるのは私的制裁と斬込隊だけである。

そこでこの際、自分の体験を出来る限り思い起し、極力正確に書いてみようと思う。そしてこれらが、赤軍派のリンチやロッド空港のテロと関連があるかないかは、読者の判断にゆだねよう。

前述のように、軍隊内のリンチは「私的制裁」といわれた。この言葉のもつ強い意味は今ではもうわからなくなっているようだが、軍隊では「私的」という言葉が、すでに「厳禁された」の意味なのである。軍隊とは私的行為が一切許されない、「一人になれるのは便所の中だけ」の世界であった。報道が

正しければ、赤軍派のアジトもこの点は共通している。

いずれにしろ、目がさめたから起きるのではなく、起床ラッパで「起きろ」と命ぜられたから起きるのであって、命ぜられない限り、起きたくても起きてはならない。寝るのも同じであり、消灯ラッパで「寝ろ」と命ぜられるから寝るのである。

従って朝起きること自体がすでに私的行為ではなく、同様に夜寝るのも私的行為ではない。そしてこの起床に始まり就寝で終る一日のすべてが、命令と規則のみで行われ、常に監視されつづけていた。規則もつまるところ「軍隊内務令」その他に基づく命令であるから、一切は命令であり、「私的」ということは皆無である。軍隊の「地下出版物」には、次のような歌があった。

「ヒトツトセ ヒトのいやがる軍隊へ

志願で出てくる 馬鹿もいる

御国^みのためとはいいいながら

で始まって十まであるのだが、この九番目が

「コノツトセ コーも規則は良くできた

寝るも 起きるも みなラッパ

命令・回報・食事まで

となっている通り、すべて命令であるから、「私的」即「不法」であるといつてよい。従って「私的制裁」すなわち「勝手に兵が兵を制裁すること」は「軍規紊乱」であり、厳しく禁じられていたのは当然である。

私が入営した当時、この私的制裁はすでに軍隊内で大きな問題となっており、「私的制裁は軍民離